

マゴソ通信



ごあいさつ

ケニアのナイロビにあるキベラスラム。そこで生まれ育ったリリアンさんが1999年、スラムの長屋の一室で孤児を集めて始めた寺子屋、マゴソスクールは、その後早川千晶さんが加わり二人三脚で発展を続け、ケニア、キベラを襲う様々な危機や困難を乗り越える度に子どもたちの数が増え、音楽活動・朝昼の給食・ジュンバラワット・OBOGクラブ・障がい児特別学級等様々な事業を展開し、現在は600名を超える子どもたち、卒業生たち、支える大人たちが共に生を営むbig familyになりました。それを支える運営費も次第に増え、時に資金難に陥ることもありましたが、様々な取り組みやご厚情に支えられ何とか乗り切ってきました。しかし、とうとう「その時」が訪れてしまいました。

そこで2015年10月18日、マゴソスクールの経営危機を乗り越えるべく、全国各地で様々な立場と行動でマゴソスクールを応援して来たメンバーが集い、力を結集し、マゴソスクールを支える会はスタートしました。その時に参加できなかった方々も加え、この半年間に二回の緊急募金を呼びかけ、講演活動やグッズ販売などに取り組み、ようやく夏までの運営資金を得る事ができました。この場を借りて心より御礼申し上げます。

これからはサポーターの皆様、ひとりひとりが主役です。当面の目標は継続的にマゴソスクールの財政面を支えることですが、それがマゴソスクールの子どもの笑顔を増やしていくため、そして自身の笑顔にもつながっていく様、いろんなアイデア・企画でマゴソスクールを共に盛り上げ、幸せの輪が広がって行くことを望みます。これからも、皆さまの一層のご協力をお願い致します。

マゴソスクールを支える会会長 大城研司



ダン校長先生と子供たち↑

オギラ教頭先生、朝礼中→



会員状況

2016年4月14日現在
44名

お知り合いの方にぜひご紹介ください。ご必要でしたらパンフレットを送らせていただきます。事務局までご連絡ください。

マゴソスクールを支える会

事務局 〒511-0044 三重県桑名市大字萱町54-1

Mail : info@magoso.jp

HP : http://magoso.jp/

Facebook : https://www.facebook.com/magososupportersclub/

マゴソスクール物語 その1 リリアンとの出会い

早川 千晶

私は、そもそもはアフリカに支援活動をしに来たわけではありませんでした。

世界を放浪しながらアフリカにやってきて、アフリカもしばらく旅したあとでナイロビに定住して働きはじめ、ケニア生活も10年を超えたところにマゴソスクールははじまりました。

私が大学に入学したのは1985年です。その頃の日本はバブル景気まっしぐらの時代で、世の中ほとんどに浮かっていた。お金がどんどん稼げる時代で、そんな世の中が私は本当に虚しかった。生きる上で大切なことは何なのかと深く思考する世の中ではなかった。それを真剣に考えていた前の時代の人々は、社会を捨てて山の中にもっていった人々がいました。山の中までそんな人々に会いに行っては、彼らの暮らしぶりに感銘を受けつつも、なんだか私はちょっと納得できなくて悶々としました。世界を自分でよく見て、考えて、自分が納得できる生き方がしたいと思った。だから旅がはじまりました。18歳のときのことです。

旅は本当に楽しくて夢中になりました。もっともっと遠くへ、もっともっと奥地へ、私がそれまで想像もしていなかった生き方をしている人々に会いたかった。そこでみんなが何を大切に、どんな生活をしているのか知りたかった。旅はどんどんエスカレートしていった、ついに日本には帰らないでそのままケニアで生活しはじめました。世界中旅する場所どこも私は好きになり、それぞれの素晴らしさがあったけど、アフリカで一番のインパクトを受けました。アフリカは世界中のどことも違うワンダーランドだった。その力強さと大らかさに強烈に惹かれた。

ただ通り過ぎていくだけの旅人としてではなく、とことんアフリカと付き合いたいと思った。それでケニアで仕事を探したら見つかって、ナイロビで働きながら生活をしはじめました。

私がなぜそれからしばらくしてキベラスラムでの支援をはじめたかといえば、それは、彼らは私にとって身近な隣人だったからです。貧富の格差や劣悪な医療状況、どうしようもない死、子を失う悲しみや病の苦しみなど、日常的に身の回りにある現実でした。私はナイロビのタウン（中心部）



リリアンさんが自分の自宅の一室に作った小さな寺子屋。

マゴソスクールのはじまり。

の旅行会社で9年間働きましたが、その当時ナイロビの町には浮浪児があふれているのが普通の光景でした。通勤の行き帰りや昼休みに外を歩くと、浮浪児が後ろからついてくることはよくありました。彼らは駐車場で見張りをしたり、車を拭いたり、買い物の荷物を持って運ぶなどして小銭を稼ぐ子たちもいました。だから私も、日常的に、彼らに荷物を持ってもらったりしながらおしゃべりをすることができました。いつも同じ場所には同じ子たちがいて、顔見知りにもなりました。

私が毎朝、毎夕、通勤で通る道の角で、毎日ピーナッツを売っている小さな男の子がいました。煎ったピーナッツを円柱形にクルクルと新聞紙で巻いて、それをたくさん持って渋滞する車の窓に売り歩くのです。そんな子ども顔見知りになり、あるとき彼の家まで行ってみました。そこは高級住宅街の脇の狭い谷間に自然発生的にできたスラムでした。ボロボロの掘っ立て小屋に、病気の母親と小さな妹がいました。母親が七輪でピーナッツを煎り、それを彼が道端に売りに行くのでした。

私が働く会社には、当時ケニア人の同僚が30人ほどいて、日本人は3~4人でした。私たちは、文化や常識の違いから、ときどき何かと問題も起きるけど、ケニア人も日本人もみんな力で合わせて働いていました。ケニア人の中にも、いろんな状況の人がいました。出身部族も違い、家庭的な背景も経済状況もまったく違う同僚たちです。何かというと隣人同士助け合うという姿勢は、彼らから経験的に学んでいった生活スタイルです。同

僚の中にはスラム生活者もいれば、マイカーに乗っているケニア人もいました。家族の誰かが死んだり、病気になったり事故にあったといえば、ハランベ（カンパ）が回ってきました。昼休みに昼食を食べるお金がない同僚も普通でした。

そんな同僚たちの中には、安月給のお金を貯めて、夜間の学校に行く人たちも多かった。何しろあきらめないで粘り強く我慢強いケニア人。人生の結論なんてそんなにさっさと出るものじゃないんだって、ケニア人が決して楽ではない暮らしをせっせと生きている姿を見ながら、なんとなくそんなふうに私は思うようになりました。そしてどんな人生にも、そこにはいろんな苦労や楽しみ、喜びや悲しみがあり、幸せだとか不幸だとか簡単に言えるものではないんだと思った。生きることは、尊いことだと、心底そう思うようになった。

そうやってナイロビの街で働く毎日、いろんなものを見ました。道端で、銃撃戦で目の前で撃たれて死んだ若者がいた。朝早く街角で、ケニヤッタ通りの銀行の角で路上生活の女性が出産していた。仲間の浮浪者の女性たちがカンガ（布）で周りを囲み、赤ん坊を取り上げていた。シンナーで廃人になって寝転がっている若者の横を、サラリーマンや OL は忙しく通り過ぎる。汚物を手で握りそれを袖の中に隠し、目の前に突きつけて脅して金を取る浮浪児。社会変革を求めるデモと暴動は毎週のように起きて、昼休みに歩いていたら催涙弾を投げられて咳き込みながら走るのも一度や二度ではなかった。それもすべてナイロビの日常でした。

リリアンは、私が働いていた旅行会社に、ティーレディー（お茶汲み係）として就職してきた同僚でした。今にして思うと、彼女はキベラスラムで両親が立て続けに病気で死に、多くの弟妹をかかえて必死で生きているときの、わらをも掴む思いでやっと得た就職先でした。月給は 5000 円程度だった。

同じ会社で共に働いていた頃には、私たちはほとんど会話したことはありませんでした。私は営業部長だったし、彼女は午前 10 時と午後 3 時に社員にチャイを配って歩く仕事でした。そんな私たちが親しくなったのは、私が会社を辞めてフリーになり、キベラスラムで最初の活動をはじめてしばらくしてからのこと、リリアンも妊娠した途端

にリストラに遭い、職を失って、昼間ウロウロしていたキベラスラムの線路の上でばったり再会したのです。

再会のとき、あなたこんなところで何をしているのよと、お互いに言った。リリアンは、私はここ（キベラスラム）に住んでいるのよと言い、会社はリストラに遭って職を失ったと言った。私は、ここでストリートチルドレンのリハビリテーションセンターをやっているのよと言った。そこに雨が降ってきて、ちょっとうちに寄っていかないかと誘われたのです。

粗末な長屋の狭い一室がリリアンの自宅でした。そこで座って話をはじめたら、大雨になってトタン屋根を激しく鳴らしはじめた。雨が止むまで、私たちはそこで 2 人、いろんな話をしたのです。最初は世間話だったのに、なぜだかどんどん深い話になった。どのようにして両親が死んだか。母が死に、父が死んだとき、もう生きていくことができないと絶望して突っ伏して泣いた。すると不思議なことに、壁から声が聞こえてきた。立ち上がりなさい、そして前に向かって歩きなさい。あなたは立ち上がることができる。一歩前に足を踏み出してみなさい。歩いていけるから。と、はっきりとした声が聞こえた。それでフラフラと立ち上がって、それからひたすら何でもやって弟妹たちを育ててきた。まだ 5 歳だった末弟、6 歳だった妹、17 人の弟妹たちをどんなに必死に守ってきたか、彼らが貧困のどん底でどんな目にあったのかという話。生きるためにゴミも拾った。工事現場でも働いた。

あの大雨の中、真っ暗闇のキベラの長屋の一室で、リリアンと語り合った、あそこからはじまったマゴソスクールです。実際に学校がはじまったのはそれからまだだいぶあとの話です。



最初の教室を作っているときの早川さんとリリアンさん

2016年春・夏のツアーのお知らせ

お近くでイベントがあればぜひご参加ください!! 詳細は会のホームページで。

4月23日(土)～5月23日(月) マサイのジャクソンさんがやってくる!!

ケニア共和国、マサイマラ国立保護区の北西部に位置する エナイボルクルム村から、ジャクソンさんがやってきます!! ジャクソンさんは、この地域のマサイの青年リーダーで、10 年前からこの地域はじめての小学校建設を開始しました。マサイがその伝統文化や自然環境を守りつつ、社会変化の波に対応しながら生き抜いていくための新たな挑戦について語ります。

豊富な映像と共に、大自然の中で生きるマサイの伝統文化、野生動物と共存する生活の様子、動物や自然に対する知恵と、その継承方法、そして、彼らの大地にいま起きていることなどについてのサバンナからの生の声と、アフリカの大地の躍動感を伝える演奏をどうぞお楽しみください。

出演: ジャクソン・オレナレイヨ・セイヨ (マサイ青年リーダー) 永松真紀 (マサイ第二夫人)

早川千晶 (キベラスラムのマゴソスクール運営) 大西匡哉 (ケニアのドゥルマ民族のタイコ)

スケジュール

4月23日(土) 神戸市東灘区、兵庫県姫路市	24日(日) 大阪市北区	27日(水) 佐賀市
28日(木) 福岡県筑紫野市	30日(土) 長崎県五島列島宇久島	
5月 2日(月) 長崎県諫早市、佐賀市	3日(火) 熊本県阿蘇郡西原村	4日(水) 宮崎市
5日(木) 宮崎県綾町	6日(金) 宮崎市	7日(土) 福岡県豊前市
8日(日)・9日(月) 北九州市	11日(水) 奈良県吉野郡大淀町	12日(木) 神戸市西区
13日(金) 岐阜県大垣市	14日(土) 岐阜市	
15日(日)・16日(月) 静岡県浜松市	16日(月) 名古屋市中村区	
17日(火) 奈良県橿原市・大和郡山市	18日(水) 那覇市	
19日(木)～21日(土) 沖縄スタディツアー (羽田発着・那覇より永松添乗)		
22日(日) 沖縄市	23日(月) 那覇市	

下線があるものは早川
単独、または早川・大西
のツアーとなります。

5月26日(木)～6月19日(日) ジャンボ! ケニア! マゴソファミリーがやってくる!!

ケニアのナイロビにあるキベラスラムの奥深く、孤児、貧困児童、元ストリートチルドレン、虐待された子どもたち、エイズ孤児、労働させられていた子どもたちなどを救済する駆け込み寺「マゴソスクール」があります。

スラムで生まれ育ち、自分自身も孤児だったリリアン、8歳で母親が死に、赤ん坊の弟を路上で育ててきた元浮浪児で現在はマゴソスクール教頭のオギラ、ケニア在住28年の早川千晶、音楽で子どもたちに力を与える大西匡哉、フェアトレードで子どもたちへの支援を行う石原輝、この5名のマゴソファミリーでトーク&ライブを行いながら日本各地を駆け抜けます。

どん底のような貧困の中、仲間たちで力を合わせ、子どもたちを救済する彼らの命の歌と、元気が出るお話をお届けします。キベラスラムのいまを共有し、未来への希望を共に生み出しましょう。

出演: リリアン・ワガラ (キベラスラム在住、マゴソスクールのお母さん)

へゼカヤ・オギラ (キベラスラム在住、マゴソスクールの教頭先生)

早川千晶 (キベラスラムのマゴソスクール運営)

大西匡哉 (ケニアのドゥルマ民族のタイコ)

石原輝 (NPO アマニヤアフリカ代表)

つらい時ほど笑ってみる
のよ。そうすればまた前
に進む力をもらえるから

あきらめなければ
夢は絶対かなう

スケジュール

5月26日(木) 鳥取県倉吉市	27日(金) 大阪市浪速区	28日(土) 徳島県鳴門市
29日(日) 高知県吾川郡いの町		
6月 1日(水) 山口県宇部市	2日(木) 神戸市中央区	3日(金) 大阪府羽曳野市
4日(土) 三重県桑名市	5日(日) 名古屋市南区	8日(水) 岩手県盛岡市
9日(木) 仙台市	10日(金) 福島県会津若松市	11日(土) 東京
12日(日) 埼玉県深谷市	15日(水) 東京都港区	16日(木) 東京都江東区
17日(金) 東京都八王子市	18日(土) 長野県北安曇郡池田町	19日(日) 岐阜県高山市

主
支
催
え
る
会
です。

このあと、早川千晶と大西匡哉がポレポレアーで6月21日・22日、新潟県、6月23日から7月10日、北海道を回ります。

